ライフスタイル

探訪 新ライフスタイル

ペットが家族化、増える支出

真の共生、環境づくり途上

犬や猫などペットの販売価格が高騰している。コロナ禍でのテレワークの普及により自宅で過ごす時間が長くなったことや、自粛生活のストレスなどを受けてペット需要が高まった。

また、昨年6月には改正動物愛護法が施行され、劣悪環境な飼育への行政指導、ペットショップやブリーダー飼育の頭数制限など高騰の要因である。いくつの規制も背景にあり、需要が供給を上回り続けたのかからは、ペットショップが前年度比で売り上げが急増したとの回答を得た。

現在、最も人気がある犬種の「トイプードル」は30万～50万円程で販売される。このほか「チワワ」「ミニチュアダックスフント」といった小型犬が上位に並ぶ。一般社団法人、ペットフード協会の調査によると、犬全体の平均寿命は2010年が13・9歳だったのが、20年では14・48歳と長寿化が進み、人間に換算すると約4年も伸びたことになるという。また、犬に関する月間支出額平均は1万2020円で、ペット用サプリメントを購入する飼い主も増えるなど、ペットの家族化が顕著なのがうかがえる。

ＡＨＢＡＳＥでセカンドライフの里親を待つ犬たち

18年に東京・両国で開業した「ＡＨＢＡＳＥ」は、ペットと共生するライフスタイルが潤いを与えると改めて感じさせる場だ。そこは日本最大規模のペットショップ「ペットプラス」運営企業による、動物と人間の幸せな共生社会の実現をテーマにしたペットのコミュニケーションスペース。犬と食事を楽しめるカフェ、クリニック、セルフウォッシュルーム、トリミング、ホテルなどがあり「ペットの聖地」と言えよう。

目を引いたのは、ハンディキャップを持った犬、ブリーダーの元で活躍していたパートナードッグ（引退犬）のセカンドライフとしての里親探しを積極的に行っていることだ。譲渡となるので、飼い主希望者との面接や飼育条件を確認後に、ワクチンなどの初期費用のみで引き渡される。高い費用を出さずとも新たな家族を見つけられるのは、社会貢献の面でも意義が大きいだろう。

東日本大震災から10年が経過し、昨年も多くの地震や風水害といった自然災害が多発した。実際には避難所にペットを持ち込むことができないケースもあり、真のペット共生社会には災害時のペット救護対策が不可欠だ。ＡＨＢＡＳＥの運営会社、ＡＨＢ取締役の長谷川龍太氏は「災害時セミナーを開催して犬と一緒の避難訓練を行ったり、墨田区と災害時のペットの受け入れ避難場所として連携したりしている」と語る。

動物と人間が暮らしやすいペットフレンドリー社会の実現には、越えるべきハードルが多いことを感じる。また、生体を扱うからこそ、ペット業界にはさらなる透明性、社会性が不可欠だろう。ペットと人間に優しい社会が実現した暁には、人とペットとのつながりがもたらす、真の幸福感やライフスタイルの豊かさがあるはずだ。

（商い創造研究所代表　松本大地）